卷頭言

岡公の扶宗護法

小林瑞淨

岡公生誕六百年が宛も金鵄輝く聖紀二千六百年に相當せる爲め奉讃會が生れ其の一代に於ける偉績を顯彰せらるゝことは洵に隨喜に堪へぬ次第であるが、佛專學報が茲に岡公に關する特輯號を發刊し大いに其教學を闡明して宗徒を覺醒し傳道の指針を與へ時代の要望を充たさんとするは又能く時機に契へるものである。

宗祖開宗後二祖三祖を經て次第に完成の域に達せる吾宗も、三祖入滅後百有餘年間は異彩ある學者の輩出もなく傳道の方面又雄辯宏辭の人材に缺け、本宗の最も振はざりし時代であり他方に於ては僅かに小庵佛堂の散在するのみであつて殿堂の觀るべきものは勿論なく、禪眞言などの如く權勢を有せず社會より其存在を認められぬ狀態であつたのである。

岡公出世の當時は朝廷南北に分かれ群雄各地に割據し互ひに其覇を爭ひ人心は恟々としてその歸趨に迷ひ居りしに、會々支那禪僧の來朝する者多く彼等の說くところ無一物を以て最上とし恬淡にして脫塵の風あり、爲に戰國武士の氣風に克く投合せるものあり。殊に幕府の之を遇すること甚だ篤かりしに由り鎌倉にも京都にも大伽藍が建立せられて五山十刹蔓を竝べ、禪宗獨り他宗を睥睨して大いに敎線を擴張したのである。其時最も熾んに信仰せられたのは臨濟禪であつて武士階級は言ふまでもなく其他の上流の人士も皆禪に依て安心立命を得んことを願ひ、其間夢窓疎石・春屋妙葩・虎關師練などの英傑現はれ文學に敎化に力を致すと共に政治外交の舞臺にまで活躍せる爲倍々勢力を張り、吾宗に對しては虎關は淨土宗には傳

燈の系譜なければ寓宗なりと貶し夢窓は夢中問答を書いて小乘教なりと斥け盛んに非難を加へたのであるが、悲しひかな吾宗には之に應戰する學者は出でず眞に孤城落日の感があつたのである。

斯秋博識多才の吾が岡公は寓宗なりとの汚辱に憤激して慨然として起ち如何にせば彼等に對抗して二祖三代の勢威を回復し宗義の顯揚を爲すべきかに苦心せられたのである。而して先づ刻苦勉勵して列祖相傳の祕訣を探ぐり大小權實の蘊奥を窮め健筆を揮つて淨土眞宗付法傳を著はし、吾が宗脈の傳燈を論じて三國禀承の旨を昭かにし、又圓戒の傳燈については淨土傳戒論を作りて南岳以來嫡々相承たる所以を主張して虎關の迷妄を破り、頌義三十卷を大成して全佛教の教理を分類批判し、吾宗の教理は頓教中の頓教にして究竟大乘最上の地位を占むると喝破し、夢窓などの謬見を訂すと共に大に吾が格外の宗風を宣揚せられ、而も堂々たる論陣を張り詞鋒の鋭利なる諸宗の學者をして瞠若たらしめ、内に於ては宗徒を覺醒して因循姑息の弊風をすて進取獨立の態度を執らしめられたのである。此點より言へば斯の大著述は古德の言はれた如く實に淨國の金湯蓮門の樞鍵であつて寔に是れ古今に獨歩せる大法輪妙辨才を以て佛事を作すものと云ふことが出來るのである。

岡公一代の述作は三十餘種百數十卷の多きに及ぶのであるが、中には神佛二道の關係を論じて國民信仰の統一に資し、又神典などを註釋して古典文化の精神の重要性を强調し、日本主義の宣傳に竭されたる功績は現下の時局に對し示唆するところ頗る意味深長である。今や空前の事變に逢ひ一部迷妄者流の批議に直面せる吾等宗徒は、どこまでも法城を嚴護して法門を開闡し以て念佛報國をせねばならぬのであるが、夫れが爲めには岡公生涯の芳躅を仰ぎ一化八十年の心勞を偲びつゝ　隨他扶宗の大活躍に學ぶところ多々あらねばならぬと思ふのである。